

小学校体育授業において児童をモデルとして起用することの 教師の意識に関する研究

神戸諒平 (東京学芸大学)

1. 目的

本研究の目的は、様々な体育授業場面において教師がどのような意図を持ってどのような児童をモデルとして起用しているのかという教師の意識を明らかにすることである。

2. 研究方法

- 1) 対象者：体育授業を行ったことがある小学校教員計 60 名（東京都で 4 校、長野県で 1 校、新潟県で 1 校を対象とした）。
- 2) 調査方法：質問紙（郵送法、直接配布法）。
- 3) 分析方法：回答された内容を KJ 法を援用して意味のまとまりごとに分類し、カテゴリ一名を付け、構造化を試みた。

3. 結果と考察

*本研究では、モデル学習を「児童の動きや演技を動きの一例として取り上げ、他の児童への見本として提示すること」と定義づけ、考察した。

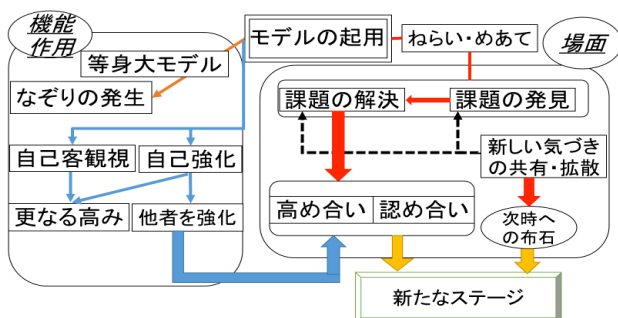


図1 教師が考えるモデル学習の有効性について

モデル学習の有効な「機能・作用」について、モデルとなる児童には、「自己強化」や「自己客観視」により、自身が「更なる高み」を目指すことや、自身だけではなく「他者を強化」する存在にもなり得るということが示唆された。一方で、モデルを見る児童には、モデルを見ることによって「なぞり」と言われる3段階のステップ（①やっ

てみたい②わかる気がする③できる気がする）が頭の中で発生するということが解釈できた。また、この「なぞり」の発生はモデルがモデルを見る児童にとって身近な存在である友達であり、等身大であるからこそ促進されるものであると教師が考えているということが示唆された。

そして、これらの機能・作用を扱う場面として課題の発見・解決をする場面、新しい気づきの共有・拡散をする場面、高め合い・認め合いの場面の3つの場面があるということが示唆された。

さらに、モデルに起用する児童については、①できる・達成した児童②ねらいにせまるきっかけとなる児童③思考している児童④自信をつけさせたい児童⑤授業雰囲気により影響を与える児童の5つの状態の児童を、教師はモデルとして起用しているということが解釈できた。

4. 結論

教師はモデル学習の有効性としてモデル学習そのものの「機能・作用」と、その機能・作用を有効に扱うことができる「場面」があると考えていることが明らかになった。加えて、起用される児童とモデル学習が行われる場面は相互に関係しあっていることが有効なモデル学習の条件の1つであると教師が捉えているということが示唆された。

そして、①モデルとなる児童のため②モデルを見る児童のため③授業の内容的な深まりのため④児童同士の関係性のためといった意図に基づいて、教師は児童をモデルとして取り上げているということが明らかになった。

5. 主な参考文献

- 1) 朝岡正雄, デジタル教材の登場で問われる教師の力, 体育科教育, 60 (5) : pp.34-37, 大修館書店, 2012